

一宮市
博物館
だより

No.30 2002.3



猫島遺跡出土弥生式土器

平成14年度
企画展

「猫島遺跡—弥生時代のムラ—」

平成14年 4月27日(土)から5月26日(日)まで
〔休館日：4月30日(火)、5月7日(火)、13日(月)、20日(月)〕



環濠



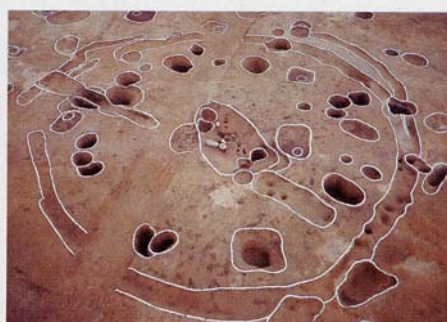
方形周溝墓



墳丘墓の溝の中で検出された土器



大型掘立柱建物の柱穴



松菊里型の円形住居跡

写真提供：(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

1999年から2000年に(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターによって実施された、千秋町塩尻の猫島遺跡の発掘調査で、今から約2000年前の弥生時代中期のひとつの集落(ムラ)の全容がほぼ解明できました。

今回の展示は、猫島遺跡から出土した弥生時代の遺物を中心に展示し、「環濠」「住居・建物」「墓」「水田」などをキーワードにして、猫島遺跡における弥生時代の暮らしを考えます。

また、実際に猫島遺跡の調査に携わられた愛知県埋蔵文化財センターの方を招いて、講演会を開催します。

と き／ 5月12日(日) 午後1時30分から

テーマ／「総括猫島遺跡」

講 師／(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
調査研究員 洲崎 和宏さん

と き／ 5月19日(日) 午後1時30分から

テーマ／「猫島遺跡の大型掘立柱建物」

講 師／(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
調査研究員 蔭山 誠一さん

『西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書 — 一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅲ』刊行

平成8年と9年に実施した丹陽町伝法寺地内の3つの遺跡の発掘調査報告書を刊行しました。A4判、92ページの冊子で、あわせて平成元年に実施した範囲確認調査で出土した遺物も掲載しています。

西大門遺跡では、奈良時代の住居跡が検出されており、北に隣接する飯守神遺跡を含めて、広い範囲に古代の生活域が展開するものと推定されます。

飯守神遺跡からは、「美濃」「美濃国」と施印された須恵器が出土するとともに、奈良時代の竪穴住居跡が検出されています。また、弥生時代中期の石器、土器などの遺物も多量に出土しています。

五輪ヶ淵遺跡では、中世の遺構を検出しており、試掘調査で出土した古代の須恵器や、中世の祭祀に伴うと考えられる土師器の皿を掲載しています。

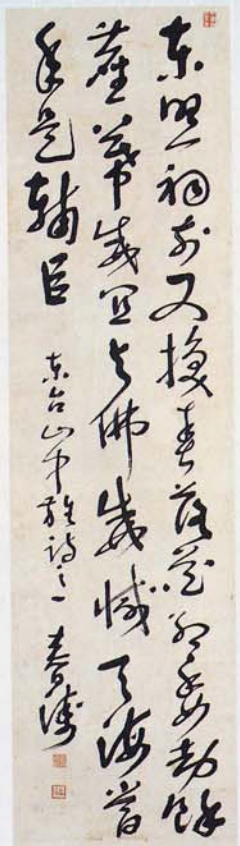
博物館で1部500円で頒布しますので、ご希望の方は博物館受付でお買い求めください。



「美濃」施印須恵器



検出された住居跡



森 春濤

夏季企画展

明治の文雅

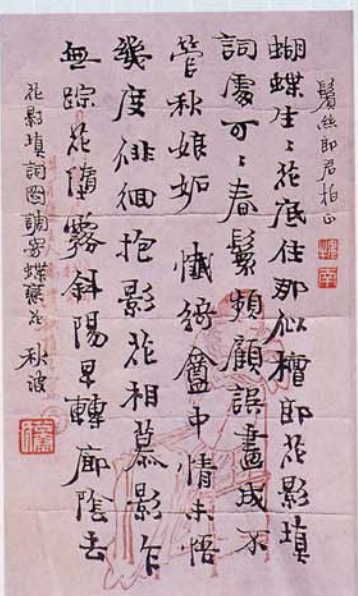
森春濤をめぐる漢詩人たち

平成14年7月20日(土)～9月1日(日)

(休館日 毎週月曜日)

中国から伝わって以来千年以上の伝統を持つ日本の漢詩は、明治という時代にその隆盛を極め、また、衰退のはじまりをも迎えたのであった。やがて、自由に心情を表現する近代詩が民衆の圧倒的な支持を得て、その座を譲ることになったからである。

文政二年(一八一九)一宮に生まれた森春濤は、はじめ医を業としていたが、詩作への情熱を抑えがたく、



森 槐南



永坂石棟

ついには廃業して職業的漢詩人の道を歩んだ。江戸時代には、武士・儒者・医者・僧侶などもつばら本業の傍らで詩を作り、幕末期には、維新の志士たちが自らの思想の表白を漢詩に託していた。その中で、世間と歩調を合わせることなく、ひたすら自らの感性のままに詩作を行っていた春濤は特異な例といえよう。

そして、明治七年(一八七四)五十六歳という当時としては高齢で上京し、新たな活動の場を得てからは、水を得た魚のごとく日本の漢詩壇をリードする存在となった。当時の詩壇は、「有隣舎」の同門である大沼枕山や、岡本黄石・小野湖山らが覇権を握っていたが、維新後の新しい生き方を求めていた人々に春濤の詩は新鮮な感動をもって受け入れられたのである。時は、もうすぐに西洋文学が席卷する頃であった。

翌年、先の三人をはじめ

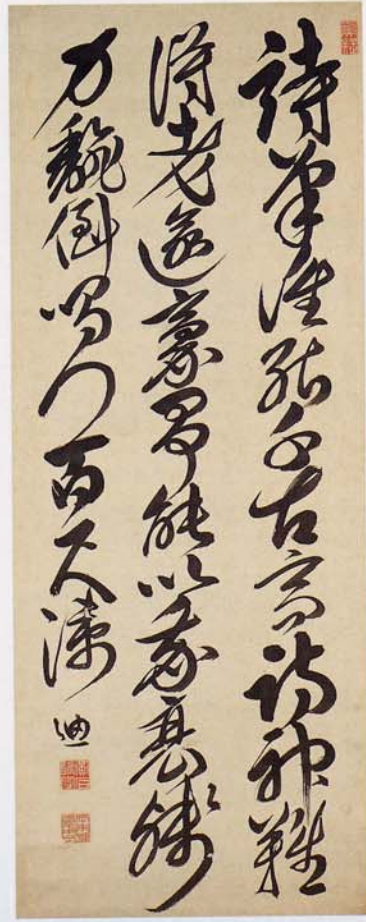
専門と余事とを問わず百六十六家の作品を集めて編集発行した『東京才人絶句』は好評を博し、彼の開いた「茉莉吟社」の機関紙「新文詩」も九年間で百集を数える盛況ぶりであった。そして、春濤を慕い吟社には絶えず多くの詩人たちが集まり互

いに競い合っていたのである。

春濤没後の明治四十五年(一九二二)、彼の門人で娘婿でもある森川竹磔によって出版された『春濤詩鈔』二巻には、二千三百七十余首が収録され、天保四年(一八三三)から亡くなった明治二十二年(一八八九)までの作品が編年体でまとめられている。ここには、様々な出会いや出来事が漢詩で表現されており、当時の文人たちの交流の様子が窺われて興味深い。

この展覧会では、そうした森春濤をめぐる人々の作品を展観することにより、明治という近世から近代への移り変わりの中にあつて、文字と墨に自らの情熱を傾けた詩人たちの心を感じとってみたいと思うものである。

(毛受英彦)



岡本黄石

平成14年度 催し物のご案内

● 4月27日から5月26日まで

企画展 猫島遺跡 一弥生時代のムラ

名神高速道路下り線一宮パーキングエリア建設に伴う(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財センターの発掘調査で、千秋町塩尻にある猫島遺跡から出土した遺物を展示。弥生時代の集落の景観を再現するとともに、人々の暮らしを復元します。



猫島遺跡 一弥生時代のムラ

● 7月20日から9月1日まで

夏季企画展 明治の文雅 ～森春濤をめぐる漢詩人たち～

一宮市出身の森春濤は、幕末・維新の激動期をくぐり抜け、晩年は東京にあって明治の漢詩壇を先導してきました。彼の薫陶を受けた文人は数多く、明治文学に大きな影響を与えました。この展覧会は、彼ら漢詩人たちによる墨の魅力を紹介するものです。白い紙に書かれた個性あふれる運筆の躍動感は、近代書道への道筋を切り開いたものでもあります。



明治の文雅
「森春濤をめぐる漢詩人たち」

● 10月26日から11月24日まで

特別展 川から海へ ～古代の流通を考える～(仮題)

弥生時代から古代にかけての人々の交流、物資流通に焦点をあてた展覧会。多くの河川が海に注ぐ濃尾平野では、船が物資運搬の道具であったことは近代までわかりませんでした。そこで、立地から生まれるこの文化的特徴を、2か年にわたって弥生時代から近代まで追います。



くらしの道具 ～今と昔～(13年度)

● 12月7日から12月23日まで

冬季企画展 2002一宮市現代作家美術秀選展

一宮市を中心に活躍する美術作家の日本画・洋画・工芸・彫塑・デザイン・書・写真を展示します。

● 1月11日から2月23日まで

収蔵品展 くらしの道具 ～今と昔～(仮題)

今回で12回目となる子ども向け展覧会。本年は、平成14年度からのカリキュラム変更に伴い小学校3年生を主な対象とせず、広く「子ども」を対象とした歴史・民俗・自然に関する展示をする予定です。



手つむぎ・染め・織り展(13年度)

● 3月2日から3月16日まで

作品展 手つむぎ・染め・織り展

講座のご案内

博物館
講座

子どものための尾張歴史講座 ～体験!考古学～ (8月3日、10日、24日)

小学校高学年から中学生を対象に、尾張地方の文化的特徴を紹介する講座の第3回。特に、考古学を1学期に学ぶ小学校6年生を重点にする、考古学の体験講座。「考古学入門」「石器入門」など。

博物館
講座

尾張平野を語る7 川から海へ ～古代の流通を考える～ (10月～11月のうちの日曜日3回)

連続講演会「尾張平野を語る」シリーズの7回目。「特別展 川から海へ ～古代の流通を考える～」に併せて、古代の人とモノの動きをテーマに3人の講師を招いて開催します。

織
維
講
座

4月～2月 3月に作品展

一宮地方は、江戸後期から明治前期にかけて、結城縞や棧留縞など縞木綿の生産で有名でした。本講座は、この縞木綿の歴史をたどるとともに、その当時の技術の保存及び伝承を目的としています。通年計20回の講座。年度末の「手つむぎ・染め・織り展」では、1年の成果を作品として発表します。

古文書
講座

5月～2月

本講座では、博物館に保管されている近世文書をテキストに使用します。古文書の読解力を養うのはもちろん、資料を通じ、江戸時代の人々の生活や村の様子を探り、地域社会のあり方を明らかにすることを目的としています。月1回開催で、5月から2月まで計10回の講座です。

平成13年度 催し物の記録

4月22日ほか 博物館講座 子どものための尾張歴史講座

「石刀祭」「黒岩川祭」「ばしょう踊」「甘酒祭」「馬場秋祭」を小学生が調査する講座。残念ながら、今回は応募者数が少なく、「石刀祭」の実施のみとなりました。石刀祭は市内今伊勢町馬寄に残る江戸時代から続く祭礼。犬山型の山車3輛とからくり人形が特徴的です。ただ、今回は何日もかけて調べる（石刀祭の場合は5日間）ということの難しさを実感しました。参加者は4人、その成果は普及ポスターで、各小学校に配布する予定です。

4月28日から5月27日まで 春季企画展 妙興寺の絵画名宝展

南北朝時代創建の、妙興報恩禅寺（妙興寺）。尾張国随一の巨刹として知られた同寺は多数の宝物を伝えています。今回の展示では、そのなかでも多くを占める絵画遺品について注目してみました。仏画と水墨画を中心にして、室町時代から江戸時代へと連なる禅の美術をたどりました。

7月22日から9月9日まで 夏季企画展

一宮市制80周年回顧展 ～ふるさとの歴史万華鏡～

大正10年に一宮市が誕生してから80年。その間、幾多の苦難を乗り越えて今日のまちは築かれました。本展では、絵葉書や鳥瞰図、広告ちらし、地図、写真などさまざまな資料とともに、その足跡をたどりました。長い時間をかけて、じっくりとご観覧なされるご年輩の方々の姿が、印象的でした。

10月6日から11月4日まで 市制80周年記念特別展

銅鐸から描く弥生社会 ～埋められた銅鐸の謎～

国宝荒神谷銅鐸3点、桜ヶ丘銅鐸3点、重要文化財大岩山銅鐸2点の実物資料をはじめ、複製資料を含めて52点の銅鐸、銅鐸出土遺構、復原銅鐸など関連資料を展示しました。会期中の入館者数は1,910名とやや少なめでしたが、来館者のみなさんに銅鐸がどういうものなのか、どのような使われ方をしていたものなのか、そしてまたどのように埋納されて忘れられたのを理解していただけたと思います。また会期中に開催した、フォーラム・シンポジウムも好評でした。

たった1点ですが、一宮市内で出土した八王子銅鐸の持つ意味、一宮を中心とする尾張平野の独自性を市民のみなさんにも考えていただくよい機会となったと思います。

10月13日 フォーラム 新しい弥生時代像を求めて

10月14日 シンポジウム 銅鐸から描く弥生社会

12月22日から1月6日まで 冬季企画展 2001一宮市現代作家美術秀選展

一宮市を中心に活躍する美術作家への依頼作品、および第59回一宮市美術展市長賞受賞作品を展示しました。出品は、日本画・洋画・彫塑・工芸・デザイン・書・写真に及びました。7日間という短い期間にも関わらず、たくさんの方にご覧いただけました。

1月16日から2月24日まで 収蔵品展 くらしの道具 ～今と昔～

歴史を初めて習い始める小学校3年生を主な対象にした展示。平成14年度からは小学校4年生のカリキュラムに変更となるため、11回目となる今回は一つの区切りでもあります。毎週日曜日には、石臼、カラサオ、マンガ、綿繰ロクロ、糸車など、道具を体験できる講座も開催し、3世代の家族連れで賑わいました。

3月3日から3月17日まで 作品展 手つむぎ・染め・織り展

繊維講座生と伝承会員による、第13回作品発表会。平成13年度に製作した、反物・洋服・小物類・テーブルセンターなど約70点の作品を展示しました。毎年恒例の「糸づくり大会」では多くの方に参加していただきました。

3月2日、3日、17日 博物館講座 はにわをつくろう

3月2日、3日、17日に、小学校高学年児童とその親を対象にして実施しました。今回の参加者は親子13組26名のみなさんで、野焼き用の粘土を使い様々な形のはにわを制作、その後博物館で2週間乾燥させたあと、隣接する妙興寺の境内で野焼き作業を実施しました。野焼きの日は、暖かい日で、みなさんの協力のもと、土器を焼き上げました。下部が割れたり、剥落してしまったものがあることが、反省点として残りました。



妙興寺の絵画名宝展



一宮市制80周年回顧展



銅鐸から描く弥生社会



くらしの道具 ～今と昔～



手つむぎ・染め・織り展(糸づくり大会)



土器をつくる

立会調査の結果から — 法圓寺中世墓遺跡 —



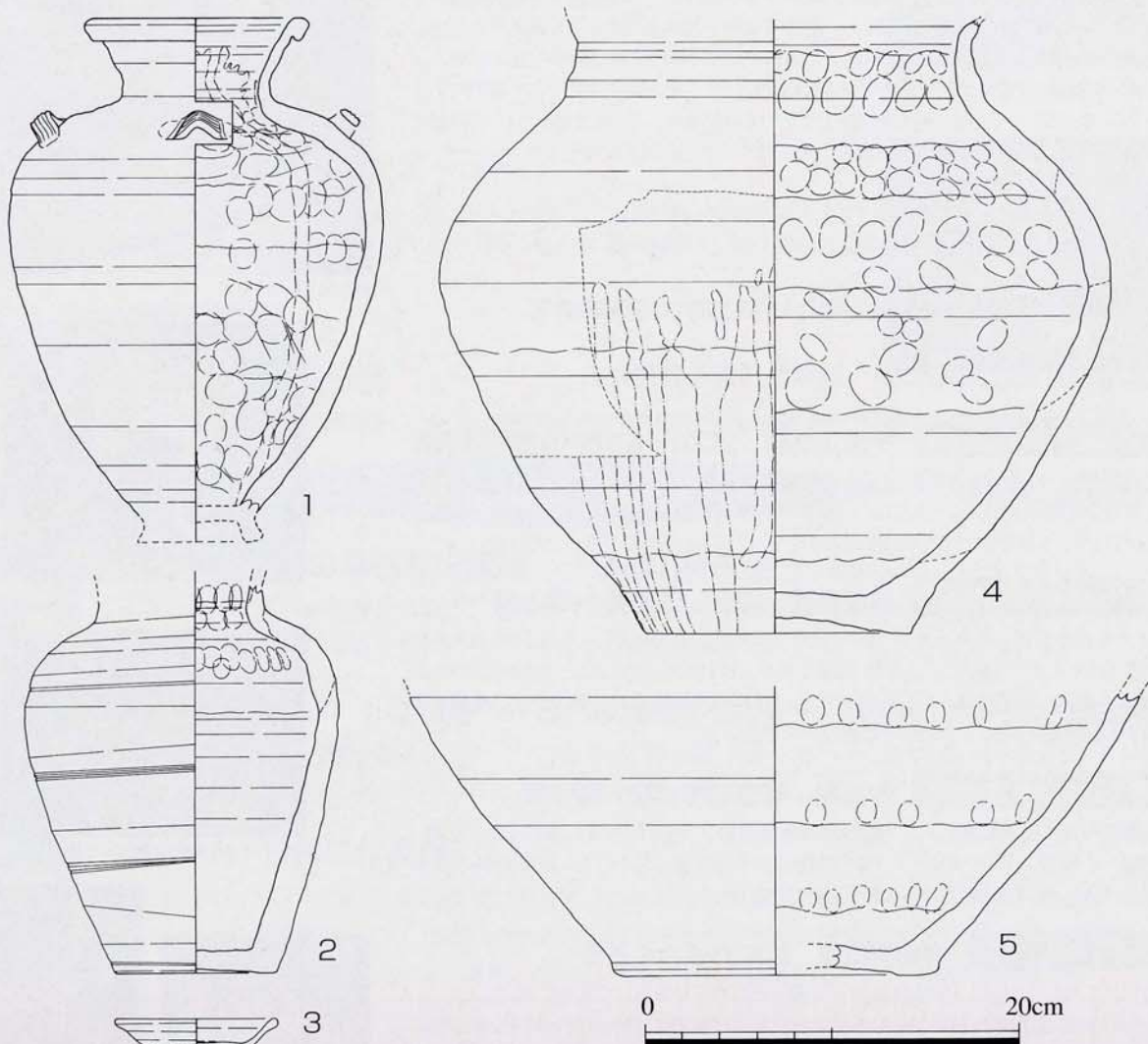
1999年4月12日から5月10日まで、法圓寺中世墓遺跡北側の道路で下水道管敷設工事が行われた。立会調査にあたった4月27日の掘削で、瀬戸蔵骨器①が見つかり、その壺を取り上げたところ、奥にもうひとつの蔵骨器②(写真)が表れた。そのため工事をストップし略測、写真撮影を行った。出土した地点は発掘調査を実施した地点の西北西20mにあたり、この中世墓の北縁部と推定される地点である。表土下約80cmのピット状の遺構の中に、蔵骨器2個と③の小皿が埋納されていたようで、蔵骨器の上部には五輪塔の地輪が見られた。また別の地点でも④⑤の常滑壺が出土した。ただしともに、この中世墓遺跡の中心でみられたような河原石の集積を確認することはできなかった。

- ①瀬戸四耳壺 胴部半分、底部を欠失（掘削中に亡失か?）。残高26.7cm、口径12cm、胴最大径20cm、全面に灰釉を塗布しているが剥落が多い。耳は型耳。
- ②東山三筋壺 口縁部を欠失しているが、出土状況から見て、埋納以前に打ち欠かれたものと推定される。残高20.8cm、胴最大径15.3cm胴部に3段にそれぞれ1条の沈線を施す。
- ③山茶椀小皿 ②の東山三筋壺の脇から出土。やや厚手の北部系山茶椀の小皿。高さ1.7cm、直径8.7cm。口縁端面を丸く仕上げている。
- ④常滑広口壺 口縁端部を欠失している。外面下部に自然釉が垂下する。残高32.6cm、胴部最大径36cm、底径14.3cm。
- ⑤常滑壺 上半部を欠失している。残高15cm、底径17.6cm。

①②③は同じピット状遺構から出土しており、蔵骨器が2個同時に埋納されるとともに、小皿が供献埋納されたものと推定され、13世紀後半代の埋納と考えられよう。また④の常滑広口壺は、13世紀前半代の常滑窯産と推定され、ともに法圓寺中世墓の性格を考える上で興味深い資料である。

(土本典生)

〈参考文献〉1995「法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書」一宮市教育委員会



出土遺物実測図 (1:4)

地積図から見た 高木城

明治時代、当時の政府は土地への課税（地租）や登記など、それぞれの目的のため、4度にわたり、大縮尺の地図「地積図」の作成を定めました。「地積図」には、土地一筆ごとの境界や地目（土地の主な用途）、地番、地名などが記されていて、現在、法務局等で土地の登記などで活用されている「公図」と呼ばれる地図のルーツにもなっています。

ところで、開発など土地形態の改変により、現在は失われてしまった景観の復元を試みるとき、地積図（特に古いもの）は有効な資料として、多くの調査で活用されています。特に城館調査では、地積図は「地形図と違って土地の一筆一筆が描かれているため、地割の形がわかり、また地目から一筆一筆の土地の乾湿、高低なども読み取ることができる¹⁾」ので、欠かせないものとなっています。今は見ることができない曲輪（城館の防御された平地）の形態や堀の存在などを推測できる場合があるからです。

今回本稿では、当館所蔵の旧高木村の地積図を利用しました。記載によると、調製されたのは1888年（明治21）、縮尺は1/600（「曲尺壹分ヲ以テ壹間トス」）です。

この旧高木村（一宮市萩原町高木）には、以前「高木城」が存在したと伝わっています。但し、「城」といっても名古屋城のようなイメージではなく、中世、存在した多くの城館のように、大地を掘ってできた堀と、その土を固めた土塁で構成されていたと思われます。

1969年（昭和44）発行『一宮市萩原町史』には、「土地高燥であって四周に田を囲らし、城廓（ママ）の形をなしている」とありますが、現在は採土や住宅建築により遺構は確認できません。そこで、地積図をトレースし、彩色したものが下の図です。畑地が、細長い地割の田によって囲まれています。茶色の畑部分が曲輪の跡、黄緑色の田が堀跡であると考えられ、先の記述と合致します。しかし、この曲輪から、更に別の曲輪が続いたかどうかは分かりません。

高木城は、文献上、江戸時代の地誌類にも記載がないようで、僅かに前掲『一宮市萩原町史』の中で、城主が瀬部正明であるだけ伝えてあります。

1584年（天正12）、徳川家康・織田信雄軍と羽柴秀吉軍により、小牧長久手合戦が勃発、尾張西部も戦場となり、両軍により多くの既存小規模城郭の改修、陣城（戦場でつくられた臨時の城）の構築が行われました。市域でも、一宮城・重吉城・小山城・大野城が少なくとも改修され、河田城が新たに築かれていますが、高木城については、全く分かりません。

しかし、地元高木で興味深い伝承を伺いました。「徳川が、少数で大軍の秀吉と戦う為に、美濃路に脇道を設けた」という内容です。美濃路は、高木城のすぐ西を縦走しています。真は分かりませんが、小牧長久手合戦当時、高木の地で何らかの普請行為・戦闘行為があったことを伝えているのかもしれない。（岩井章真）



旧高木村地積図（一部）



高木城現況



¹⁾ 千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』新人物往來社 より引用
 〈そのほかの参考文献〉

愛知県教育委員会 1991『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』文化財図書刊行会
 新井喜久夫 1977『織田氏の分国』、『一宮市域の城郭』ともに『新編一宮市史』一宮市
 佐藤基次郎 1996『公図 読図の基礎』古今書院
 萩原町史編纂委員会 1969『一宮市萩原町史』萩原町史編纂委員会



1946年（昭和21）、米軍撮影空中写真（国土地理院所蔵）

市制80周年記念シンポジウム『銅鐸から描く弥生社会』を振り返る



シンポジウム



フォーラム

一宮市博物館は昭和62年11月13日に開館し、これまで多くの展覧会、講演会、講座を開催してきました。その活動の中で、濃尾平野の根元からこの思いを発信するための一つの手法として、博物館講座「尾張平野を語る」を平成9年度から始めました。6回目を迎える平成13年度は市制80周年の年にあたり、これからの方向性を探るきっかけとなるようシンポジウムを企画し、初めての試みに挑戦することにしたのです。

1997年3月13日、東海北陸自動車道建設のため市南部大和町刈安賀八王子遺跡の発掘調査終盤、基準杭のために残っていた土層観察用ベルトから銅鐸は出土しました。たった一つしか出土していない銅鐸から弥生時代を描こうなどと、ずいぶん壮大なことを考えたものだと思えることを覚悟しながら、敢えてこのテーマにこだわりました。現在市域で確認している縄文時代の遺跡は5遺跡ですが、弥生時代の遺跡は35以上と、この地域の人口は弥生時代以降急激に増加したと考えられます。そして、この八王子遺跡が立地する地域は萩原遺跡群とも呼ばれ、弥生時代から古墳

時代の遺跡が集中する興味深いところですが、地域の歴史を語るには、縄文時代の馬見塚遺跡、そしてこの萩原遺跡群が最初のキーワードになります。

今回のシンポジウムは、(財)愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏のコーディネートによる10月13日のフォーラム「新しい弥生時代像を求めて」と、大阪府立弥生文化博物館館長金関恕氏のコーディネートによる14日開催のシンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」の2部構成となっています。(詳細は「シンポジウム銅鐸から描く弥生社会」予稿集」を参照)。13日にさまざまな弥生時代論の展開を聴講した後、弥生時代社会・精神世界の象徴である銅鐸について、8人の講師の方々による講演とシンポジウムを堪能する贅沢なものでした。参加者の満足度はグラフ1に示した評価からも明らかで、今後の糧としていきたいと考えています。また、参加者の71%が県内、そのうち26%が市内、それ以外は県外の方で、当地のみならずにも多く参加していただいたことをうれしく思っています(グラフ2)。

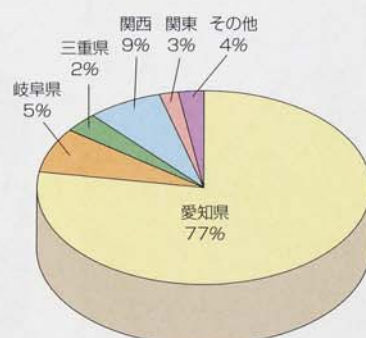
一宮市は、木曾川が犬山扇状地から沖積低地へそそぐ根元に位置し、市域の大部分は自然堤防と後背湿地に立地します。しかし、開発が進むにつれ、本来あった環境条件が失われ、自然環境や歴史的背景につちかわれてきた文化は、その地域性を見失いつつ

低地へそそぐ根元に位置し、市域の大部分は自然堤防と後背湿地に立地します。しかし、開発が進むにつれ、本来あった環境条件が失われ、自然環境や歴史的背景につちかわれてきた文化は、その地域性を見失いつつ

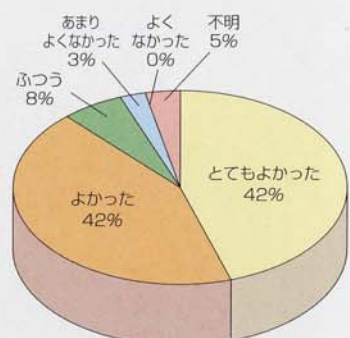
あります。市域を含むこの尾張平野では、弥生時代から古墳時代に人がより多く活動をし始めます。それはなぜか。そして、川や海を含めた伊勢湾全体を見渡すと、人はつくり、人は動き、モノは運ばれ、文化は伝播し、興味深い模索すべきテーマは尽きません。

これからも『尾張平野を語る』は、井の中の蛙にならぬよう、多くの研究者のみならずとの取り組みの中で継続することができよう、努力をしていきたいと考えています。

なお、シンポジウム予稿集はすでに完売となつてしまいましたが、間もなく学生社からこのシンポジウムの記録集が刊行されます。(久保慎子)



グラフ2 14日の地域別参加者



グラフ1 シンポジウムについての評価

一宮市
博物館
だより

第30号

発行日…平成14年3月31日
編集・発行……一宮市博物館
印刷……サンメッセ株式会社

利用案内

名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車徒歩7分
〒491-0922 一宮市大和町妙興寺 2390
TEL 0586-46-3215 FAX 0586-46-3216

【観覧料】(常設展・聴講料含む)

一般=200円(160円) 高・大生=100円(80円)
小中生=50円(40円) *()は20人以上の団体料金

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

※土曜日は小・中学生無料。(長期学校休業日および休日はのぞく)

※満65歳以上で、「一宮市発行の『老人医療費受給者証』
あるいは『シルバー優待証明カード』持参の方は無料。

